

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：33307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04257

研究課題名(和文)近代日本における在外友好・学术交流団体形成過程の研究

研究課題名(英文) Study on the organization of international friendship formed by Japanese students or scholars in modern era

研究代表者

辻 直人 (TSUJI, NAOTO)

北陸学院大学・人間総合学部(子ども教育学科)・教授(移行)

研究者番号：70523679

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はアメリカやドイツなどでの史料調査の結果、20世紀初頭に在外日本人学生同士の親睦あるいは外国人との国際交流の発展拡大について、新たな知見を得られた。アメリカにおいては、日本人学生会が全米ネットワークを形成する背景にYMCAの働きがあったことが分かった。同志社総長を務めた湯浅八郎も1916年頃イリノイ大学でYMCAの活動に加わり、国際主義への意識を強めていった。また、日本女子大学校長成瀬仁蔵は、1912年に世界平和のため帰一協会の結成を米国知識人に呼びかけた。一方のヨーロッパでは日英協会、日独協会などが組織されるが、特にドイツは都市ごとでの活動に終始し、全国的な活動には発展しなかった。

研究成果の概要(英文)：Through the research of historical materials in USA and some European countries like Germany, I clarified the development of friendship among Japanese students in foreign countries, and between Japanese and foreign students or scholars in the early 20th century. In USA, it was found that YMCA played a important role to establish a good relations between international students. Hachiro Yuasa, who was a president of Doshisha, was also influenced from the international activities of YMCA when he had studied at University of Illinois in 1916 and made himself to stand on the Christian internationalism even during the WWII. Jinzo Naruse, a founder of Japan Women's Univeresity and had an experience of studying in the East Coast of USA, appealed to spread his Concordia ideal for world peace to USA and Europe in 1912. Situation in Europe was different. In Germany, Japan-Germany Society was established in several cities in the early 20th century, but there was no horizontal relations among them.

研究分野：日本教育史

キーワード：在外日本人学生 国際交流 帰一協会 YMCA

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 23 年度から同 26 年度に取得していた科学研究費基盤研究(C)「近代日本における民間を中心とした国際教育交流の拡大に関する調査研究」で得た成果をさらに発展させるための史料調査及び考察である。これまでの研究では、主に 20 世紀初頭の日本人留学生に関する史料の収集を行った。アメリカでは私費留学生が多く、これまでその実態は明らかにされていなかった。

調査の結果、各地の大学に日本人学生会が組織されたこと、それぞれの学生会の活動が明らかになった。更に、その学生会の活動は全米へと広がっていったことが分かった。中でも、国際親善委員会 (Committee on Friendly Relations Among Foreign Students) の役割が大きいことが分かったが、同団体の詳細までは分からなかった。

一方ヨーロッパでは、官費留学生が中心だったこともあり、基本的に既に高等教育機関で教員を務めている者が留学していたので、アメリカで見られたような学生会は組織されない。しかし、それぞれの地域や国の人々との交流団体が作られていたことも分かった。

2. 研究の目的

上記のような史料調査の結果、アメリカにおいては更なる日本人学生会のネットワークに関する調査を進めることを目的とした。また、調査を進める中で、国際親善委員会は YMCA との関連が強いことが分かり、YMCA そのものの働きが大きいことも分かったので、YMCA に関する史料調査も行うことを目的とした。YMCA 関連史料はミネソタ大学

ヨーロッパについては、特にドイツにおける独日協会の形成が日独交流の大きな柱になったことを踏まえ、各都市に組織された独日協会の活動実態を知らべることを目的とした。

3. 研究の方法

基本はアメリカ、ドイツを中心とした現地での史料調査である。各大学や公文書館などに所蔵されていた史料の閲覧と撮影を行い、帰国後その史料の読解分析を進めた。

国内においては、国際交流基金や国会図書館、日独協会等での資料閲覧を行い、その内容を分析した。

4. 研究成果

(1) アメリカにおいては、日本人学生会及び YMCA に関する史料収集をワシントン大学、スタンフォード大学、ミネソタ大学、イリノイ大学、シカゴ大学で行った。その結果、YMCA の国際親善委員会が中心となって日本人学生会の運営支援の他、国籍を超えた留学生の交流事業を数多く展開していたことが分かった。

イリノイ大学は州立の大学だが、キャンパ

ス内や周辺部に多くの教会があり、学内での YMCA 活動が盛んな大学である。同大学 YMCA 関係史料が大学資料室に多く保管されている。YMCA が正に外国籍の留学生を集めて様々な交流事業をしており、日本人も多くこの活動に関わっていたことが分かった。また中国人学生がとて多かつたことも分かった。こうした YMCA を通じての国際親善が日本人、中国人、インド人、フィリピン人、ロシア人などの交流に一役買っていたことは大きな発見だった。

日本人留学生では、例えば同志社総長も務めた湯浅八郎が 1916 年にイリノイ大学で YMCA の活動に参加していたことで、キリスト教国際主義を基盤とした思想形成をしていたことが分かった。太平洋戦争の時もアメリカに留まって民間レベルでの紛争解決、国際親善を試みていた。

(2) アメリカ留学を経験していた日本女子大学創設者の成瀬仁蔵は、1912 年に世界平和のための団体「帰一協会」を結成し、アメリカやヨーロッパで同協会の広報活動を進めていたが、その活動に関連のある貴重な史料がシカゴ大学で発見された。今まで知られていなかったシカゴ大学バートン教授との密接な関りが、成瀬の思想運動を後押ししていたことが分かり、成瀬研究においても大きな成果となった。

時期尚早と言われた女子高等教育を実現するため 1901 年に日本女子大学校を設立した成瀬仁蔵は、更なる理想である「帰一思想」(宗教や道徳、精神を 1 つにしていく思想)を具体化していく過程の様子や、理想の実現を求めて 1912 年アメリカに渡った頃の様子、今回のシカゴ大学史料調査で分かった。いずれの点においても、シカゴ大学教授アーネスト・バートンとの出会いと協力が大きな意味を持っていた。1909 年にバートンと面会したことが、成瀬が帰一思想を始めるきっかけとなった。

成瀬は帰一思想を単なる宗教の統一と考えていただけでなく、性別、文明、国家をも超えて全ての目的が一つに帰していく思想を 1909 年のバートンとの会談以降から一層鮮明にしていった。女子教育も、それまで日本で低く扱われていた女子の人格を確立させ、自我を拡大させていって「普遍体への統一」を目指す目的でなされていたのである。1912 年は国際的に見ても排日運動に代表される日米外交摩擦や、世界大戦が勃発する直前の緊迫した情勢であった。そのような時期だからこそ、あらゆるものを超越した帰一思想が欧米に発信されると、興味を覚える人が多かつたと考えられる。

成瀬の欧米での活動はアメリカに続いてイギリスでも賛同者を得ることに成功し、英国帰一協会も成立した。今後は、ヨーロッパでの帰一協会に対する反響についても調査することが課題として残されている。

(3) ミネソタ大学 University Archives から戦時中にカリフォルニアから排除された日系人学生の収容を巡る対応が示された史料や、戦後になり日本から大学生を受け入れるための体制作りに関する史料が出てきた。日米関係が戦時下悪化する中で日系人収容について苦慮していた様子が伺えた反面、戦後になって日本から学生を受け入れるための体制を作ろうとした動きの背景に何があったのか、収集した史料より考察したい。こうした動きがGHQの占領政策が終わった後、対日政策上の一方針だったのか、学術や学生の文化交流的な促進がその時代にどのような意味を持っていたのか考察することは、今回の研究課題として残った。

(4) シカゴ大学では、前述の成瀬史料の他に、国際親善委員会初期の活動に深く関わっていた加藤勝治（シカゴ大学出身）のBiographical Filesを閲覧することができた。量は多くなかったが、加藤がシカゴ大学で育んだアメリカ人との交友関係や、Committeeの働きとして日本人留学生の英語力を上げるためにシカゴ大学教員に語学講座の依頼をしている様子などが分かり、20世紀初頭の日米交流上加藤が果たした役割の一端を確認することができた。その他には、戦時下に強制収容されていた日系人へのインタビュー記録、学生交流を進めていたYMCA関係史料など、研究を発展させていく上で重要な史料を多く閲覧し撮影することができた。

(5) ドイツでは、ベルリン、フランクフルト、ハイデルベルクそれぞれで独日協会に関する調査を行ったが、アメリカのような全国的ネットワークは形成されず、各都市が独自に活動をしていたことが分かった。

戦時下はナチスとの関係で国策として独日協会が結成されたこともあり、活動も政治状況を反映したものだということも分かった。特にベルリンの独日協会は、当初は東京で結成された日独協会との協力で組織されたが、すぐに戦時下政策の影響を受け、純粋な学術交流団体とは言えなくなった。フランクフルトでは、元フランクフルト独日協会顧問のゲンプト氏夫妻と面会し、フランクフルトにおける日本とドイツの交流史について詳細に教示いただいた。フランクフルトはベルリンより古く、日独の商業的つながりで形成され、商業関係者による独自の交流が生まれていた。また、『忘却に抵抗するドイツ』の著者でフランクフルト日本人学校事務局長をされている岡裕人氏に特別に面会が許され、ドイツの歴史教育やドイツ人の歴史観について教えていただいた。

フランクフルトから列車で1時間ほどのハイデルベルクにも独日協会は作られたが、こちらも戦時下政策の下で組織運営されたものだった。ハイデルベルクでは、ハイデルベ

ルク大学日本学科教授のマーティン・クレマ氏及びハイデルベルク独日協会の研究をしている大学院生と面会し、同大学史料室に所蔵されている独日協会関係史料を閲覧させていただいた。改めてドイツと日本の交流について歴史的に追うことができ、特に今回は1940年代の日独交流の（特に政治的）背景について史料から知ることができた。

(6) フランス調査では、ストラスブール市にあるバ・ラン県文書館と、ナント市にある外交史料館で実施した。バ・ラン県文書館では、ストラスブールがまだドイツ領だった頃のシュトラスブルグ大学学籍登録簿の確認を行い、日本人留学生の動静を多数確認できた。ナントの外交史料館では、日仏交流機関の1つであるアテネ・フランセの戦前史料を閲覧でき、また、在米仏大使より1906年のサンフランシスコ日系人学童隔離事件についての詳細な報告書を発見することができた。20世紀初頭の日系人の様子、特に排日運動が盛んになった頃の様子をフランス領事からの視点で描いており、極めて貴重な史料だった。こちらの内容分析については、今後論文として発表予定である。

(7) イギリスの調査では、ケンブリッジ大学及びオックスフォード大学所蔵の学籍簿から日本人留学生の実態について調査した他、ロンドンの日英協会事務所で戦前期の貴重な写真や当時の史料、刊行物を閲覧撮影させていただいた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計4件)

1 辻直人「湯浅八郎の国際感覚に対するアメリカ滞在の影響 イリノイ大学留学経験を中心に」『社会システム研究』査読あり、第36巻、2018年、33-55頁、<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/ssrc/result/memoirs/kiyou36/36-02.pdf>

2 辻直人「シカゴ大学所蔵成瀬仁蔵史料について 帰一思想形成の新たな側面を探る(上)」『成瀬記念館』査読なし、第32号、2017年、106-119頁

3 辻直人「戦前期YMCAによる国際交流事業についての一考察」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』査読なし、第9号、2017年、187-197頁、https://hokurikugakuin.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=984

4 辻直人「20世紀初頭における在米日本人学生ネットワーク形成の背景と意義」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀

要』査読なし、第8号、2016年、99-110頁、
https://hokurikugakuin.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=942

〔学会発表〕(計6件)

1 辻直人「成瀬仁蔵の帰一思想」、成瀬先生ご命日・逝去者会員追悼会(日本女子大学桜楓会)、2018年

2 辻直人「教育家・成瀬仁蔵とアメリカ知識人の交流」、学術シンポジウム第一次世界大戦期における平和の追求とその現実 帰一協会の挑戦と渋沢栄一(千葉大学)、2018年

3 辻直人「成瀬仁蔵の帰一思想と女子教育・文明・宗教」、桜楓会成瀬仁蔵研究会夏期研修会、2017年

4 辻直人「戦前期イリノイ大学YMCAにおける国際交流事業 湯浅八郎の書簡分析を中心に」、東アジアキリスト教交流史研究会第9回ワークショップ(立命館大学)、2017年

5 辻直人「成瀬仁蔵の帰一思想 その生成過程及び帰一協会との関わり」、『帰一協会の挑戦』編集合宿、2016年

6 辻直人「成瀬仁蔵の帰一思想 その生成過程及び帰一協会との関わり」、明治学院大学キリスト教研究所宣教史研究プロジェクト公開研究会、2016年

〔図書〕(計1件)

見城悌治編著『帰一協会の挑戦と渋沢栄一 グローバル時代の「普遍」をめざして』ミネルヴァ書房、2018年、143-163頁(総266頁)

〔産業財産権〕

なし

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻直人(TSUJI NAOTO)

北陸学院大学・人間総合学部子ども教育学科・教授

研究者番号：70523679

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()